民族差別とたたかう

九条の幅の中に

金井 佳子

もしかしたら、私は幼い時から国境線の上に立たされていたのかもしれない、と思ったのは、劇作家の三好十郎が書いた戯曲「冒した者」を読んだ時からだ。

1950年に朝鮮戦争が始まり、53年に終わったこの内戦は、北にソビエトが、南はアメリカによる代理戦争だった。だから38度線に国境が決められた時、朝鮮の人の意志よりも、米・中・ソの利害によって、38度線が国境になった。

三好十郎が「冒した者」を書いたのは、朝鮮戦争が始まった直後だった。

私がこの戯曲を読み、舞台を見たのはその4、5年後の25歳ぐらいの時だ。私は小さな劇団にいた。

終幕。

「国境線は線だから幅はない。幅の無いところに人は立てない。立った瞬間に両方から弾が飛んでくる。だが線に立つ事を頭で想像できるなら、立てないはずはない。たとえ次の瞬間に死んだとしても、5秒立ったという事は50年でも立てるという事だ。」と三好十郎は書いた。

その後、日本では60年の安保闘争の導火線になった砂川闘争があった。

立川基地の拡張のため、砂川の農地に米軍は工事を始め、農民たちの激しい抵抗で、基地に数人が入り込んだ。彼らは逮捕された。

東京地裁の伊達裁判長は、駐留米軍と安保条約は憲法違反だとして、立川基地に入った全員を無罪にした。

その年の12月、高裁を飛ばして、最高裁は、「米軍基地は、裁判所の審査権が及ばないとして、伊達判決を真っ向から否定した」(『市民の暦』)

日米安全保障条約というアメリカとの軍事同盟が、日本全体の反対闘争を引き起こしていた。

これは国民闘争だった。

この時「日本国民」という言葉と意識は強く生きていた。ボロボロになった国土と、戦後の飢えは、日本人の記憶の中に鮮やかに生きていた。これは60年の安保闘争だ。私は毎日国会議事堂まで行った。行かずにはいられなかった。

小学校3年の時に、尋常小学校が国民学校になった。直後に太平洋戦争が始まった。

国民学校4年生の時に一人の朝鮮の男の子が転校してきた。ひょろっと背が高く、冬でも夏物の大人の背広を着ていた。母に彼が寒そうだと言うと、母は兄の服を包んで翌日兄に持たせた。身体にヒョウヒョウとした表情があって、その後、私は芝居の役の中に、彼のイメージを下敷きにした事が幾度もあった。

その彼が、前の席の男の子にいたずらをしたと告げられ、皆の前で、教師に無残なほど撲られた。恐怖で洪水のようなおしっこをもらし、そこに転がされて、彼はウオーウオーと泣いた。それはあきらめの声だった。

私は涙をこぼした。翌日、クラスの人たちは、私の金井をとって、キン・ケイシ、と私に言った。

一度目は日本人から、二度目は在日から、私の姓を強く意識させられた。

芝居の公演がオフになると、次の公演の稽古に入るまで短期間の出稼ぎをする。雇う方は安く、私たちにとってはほどほどの給料で働けるバーが、新宿には何軒かあった。

そこで、カイゼルのような、画家のダリのような、先端がピンと跳ね上がった髭と、薄紫色の角型縁無し眼鏡をかけた、40代の彼と出会った。誰も寄せつけない鋭い目に敵意があって、この人は何故ここに来るのだろうと

思った。ベテランは丁重に敬遠するので、私のような三下が前に坐る。話しかけても返事をしないので、いつも無言でビールを注ぎタバコの火をつける。

私の芝居仲間はカナイちゃんと私を呼んでいた。

或る時、珍しく、「お前なんていうの」と言った。名をつげると「上は」と言う。カナイちゃん、と言うと彼は黙った。何日かしてまた、「お前なんていうの」と訊いた。3回目にまた。そして帰りぎわに狭い階段の踊り場で、私を天高く抱き上げた。私は一切を理解した。

私が朝鮮人でないことをどんなに残念に思ったかわかるだろうか。私は日本人だと言えなかった。

この事は私の中に淀みをつくり、そして渇きになった。

50代の終わりころ、私の友人から梨が送られてきた。私の住んでいた地域では金井姓は私の家だけだと思っていたらもう一軒あり、荷物はそちらへ届いてしまった。その家から電話があり、私は荷物を受け取りに行った。30代の、小さな子どものいる彼女の最初の言葉は、「お宅はどちらの金井さんですか。家は新潟の出です」だった。その何年も前に知り合った二人の金井さんは群馬だった。群馬には金井という地名があるそうだ。

私の中でゆっくりと一本の線ができ始めた。

朝鮮の、想像力豊かな冒険野郎のキムさんが、何百年も前に海を渡って、まず新潟を発見した。百年ぐらいかけて新潟に地場を作り、もっと想像力を抑えられなかったキムさんたちは、群馬に新開地を築いた。そしてまた、限りない季節の後に、山を越えて長野にたどり着いた。私の父方は長野の諏訪の出だ。

何百年をかけてキムさんは金井姓になる。

移動は馬だっただろうか。言葉はどうして創られただろうか。どういう生活をしていたのだろうか。深沢七郎の『楢山節考』の姥捨ては、長野の貧しい山家ではなかったか。と、私の年月の中で少しずつ線はふくらみ始めた。この空想は、今は確信にまでなっている。

境界線は、国家や、その部族が秩序を保つためだから何人（なにびと）も犯すべからず、は、少しずつ崩れてきていると私は思う。その秩序を保つための歯止めに、どの国も部族も武力を使う。武力は使えば使うほど、境界線が曖昧になるという事を、対立する相方が知っているのではないかとも思う。

或る時、何かが心に引っかかる。鮮やかだろうと、その逆であろうと、次に何年かの後に、その事が何かのきっかけで必ず呼び戻される。その時には、少し、感受性の大事な部分として残るようになる。

そうやって81年が経った。長くもなく、短くもない81年は私の人生だ。

一人の生涯の記憶は、自分が生きた、生きられた、の切実さと安堵なのだ。己を消す方向には決して向かわない。

その人の生きた楔を打つことで、九条の幅は、線を少しずつ両側に広げられると私は思っている。

（かない・よしこ／本会会員、70年安保闘争の11月12日、佐藤首相の訪米に反対して、羽田空港の入口で「非暴力反戦行動」の一人として座り込みをする）